

「祭り」  
のおはなし





瓢湖に残る白鳥

歩  
里



かつて私は祭りの主役であつた。祭りは賑やかで解放的な記憶しかない。そんな私が祭りの裏方になつてから二年がたつた。裏方は祭りの当日だけ働けばよい、というわけではない。半年にわたる準備が祭りを成功に導く。遙かシベリアから戻つてくる仲間たちが安心してくつろげる寝床を見つけ、えさ場となる田んぼを選んでおく。その点、瓢湖は最高の楽園だ。その分、ライバルも多い。だから私は春に仲間たちがオホーツクの空に旅立つた後も瓢湖に残り、瓢湖とその周辺を監視している。仲間の白鳥たちにとつて私の仕事は重要なのだ。

ただ戻つてきた仲間たちから聞こえてくるであろう武勇伝を想像すると息が詰まりそうになる。ときどき視界が狭くなることさえある。特にあいつの自慢話を聞かされると思うだけでうんざりする。あいつ、与一は今頃澄み切つたシベリアの空を大袈裟に旋回していだらうか。

瓢湖に冷たい風が強く吹く日が続くようになつてきた。

「そろそろ仲間たちが戻つてくるな。」

私は瓢湖上空で幾度か旋回し、田んぼの巡回にでかけた。  
夕方、巡回から戻ると、人間から餌をもらおうとする白鳥が目に  
ついた。やつらが悪いとは思わない。間違つた生き方ではない。彼  
らも彼らなりの苦悩がある、はずだ。ただ私はできない。やつら  
から視線をそらし、空を見上げた。分厚い灰色の雲が空を覆つてい  
た。もう澄み切つたオホーツクの空を飛ぶことはないだろう。だが  
私が白鳥であることにかわりはない。私の仕事は重要なのだ。

翌朝、分厚い雲が消えた。五頭連峰から差し込んできた朝日が湖  
面から靄をあぶり出した。瓢湖は幻想的な輝きを放つていた。ぶるつ  
と身震いがした時、まだ薄暗い北の空から鳴き声が響いた。

「戻ってきた。」

仲間たちは上空を幾度か旋回し、次々と舞い降りてきた。シベリ  
アではあどけなさが残る顔つきだつたであろう若い鳥たちも生意気

なくらいの精悍な顔つきになつてゐる。知つてゐる仲間たちも次々と舞い降りてきた。私も精いっぱいの笑顔をつくり彼らを迎えた。

全ての鳥が舞い降りた後、白鳥たちの大合唱で祭りが始まつた。長い緊張から解放された鳥たちは私が用意したえさをついばみ、瓢湖の水面をかけていつた。祭りも中盤に差し掛かると、若い鳥たちは神輿に見立てた桟橋の周りで踊り続け、夫婦は長旅の集団生活から離れて二人だけの世界に浸つていつた。

それでも私は私の仕事を黙々とこなしていく。周りを小まめに飛び、少しの危険も見逃さない。仲間たちもそんな姿をたたえ最大限の称賛を与えてくれる。けれども危険を乗り越えた者にしか与えられない達成感の前では、どんな称賛も私の心には響かない。

そういえば与一が来ないな。いつもなら真っ先に武勇伝を伝えに来るはずなのに。私を避けるように離れていた知り合いの白鳥を捕まえ、与一のこと尋ねた。嵐を偵察に行くと言つてオホーツクで

はぐれたとのことであつた。

「はぐれた？あいつが？」

他の鳥たちにも聞いたが、それ以来ずっと見ていないとのことで  
あつた。

「後から来る仲間と一緒によいのですが。与一さんとは親友でした  
からそれは心配でしよう。」

「親友？特に親友というわけでは：」

「またまた。与一さんはシベリアでもあなたのことによく話してい  
ましたよ。」

「私のことを？」

「シベリアに飛来できないあなたのため、お土産話を持つて帰る  
のだとね。」

「…」

「そうそう、怒らないで聞いてくださいね。いつだつたか、若い鳥  
たちがあなたの頑固さを少しかつたのですよ。翼を傷めて飛べ

なくなつて、ますます頑固になつたとね。そうしたら、与一さん、本気で噛みついちゃつたのですよ。アイツが見つけた寝床やえさ場がどれだけ大切なのか分かつてゐるのかつて。アイツがどんな思いで瓢湖に残り、そして祭の準備をしているのか分からぬのかつて。もう止めるのが大変でしたよ：」

私は仕事場を離れた。瓢湖はいつのまにか雲に覆われていた。ボツリ、ボツリと分厚い雲が雨を吐き出しあげ始めた。

私の気持ちを与一は分かつてゐた。でも与一の気持ちに私は見向きもしなかつた。そもそも私は私自身と向き合うことを避けていたのかも知れない。裏方の仕事に求めた誇りで、現実の姿と対峙する怖さを覆い隠していたのだ。ありのままの自分を受け入れ、解放することができれば、賑やかな祭りの輪に入れるとかも知れない。

湖面を駆け上がり、久しぶりに上空で大きく旋回した。翼に痛みを感じたが、もう一度、北の空に向かつて大袈裟に旋回してみた。

大きくバランスを崩し、そのまま瓢湖に落ちていった。

「やつぱりオホーツクを飛ぶことはできないな」

驚いた表情で見ていた仲間に笑いながら話しかけた。

祭り会場に向かう途中、北の空を見上げた。与一なら大袈裟に私を笑ってくれたのだろうな。でもその笑い声を二度と聞くことはできない。そう思うと分厚い灰色の雲がキラキラとにじんでいった。



瓢湖

五頭山が紅葉で色づきはじめのころ、瓢湖に冬を告げる使者、白鳥たちがやつてきます。白鳥の湖。瓢湖はそう呼ばれています。三千キロ以上の空を渡つてきた白鳥たちは、湖でつかれた羽根をやすめ、えさをとり、鳴きかわします。優雅でほほえまい様子を、私たちは間近で見ることができます。

瓢湖で冬をすごした白鳥たちは、湖畔の桜のつぼみがふくらみはじめるころ、ふるさとのシベリアへ向けて飛び立ちます。

オオハクチョウ、コハクチョウなど六千羽近くの白鳥が飛来する瓢湖は、国の天然記念物に指定されています。また、十種類を超える多くの水鳥の飛来する貴重な水辺として二〇〇八年ラムサール条約による保護地に登録されました。  
問合先：〇二五〇一六一一六九〇（瓢湖管理事務所）

ハナ

幸せを咲かせる金魚

後藤 夏実



むかし、新発田のお祭りの金魚屋の屋台に小さな紅白色の金魚がいた。その金魚は体が小さいために、いつもひとりぼつちだつた。お客様たちも、その金魚には、見向きもしなかつた。ある、お祭りが一番にぎやかな夕暮れ時のこと。一人の老人が金魚屋に立ちよつて、店主に声をかけた。

「この金魚、見せておくれ」

「じいさん、そいつは小さくて、いい金魚じやないよ。他のにしたらどうだい」

老人は静かに首をふつて、店主にいつた。

「この子をもらおう」

店主は何もいえずに、金魚をビニールのきんちゃく袋にいれて、老人に渡した。空はすっかり日が暮れて紺色だ。老人は屋台がならぶにぎやかな商店街を歩いた。老人が歩くと、きんちゃく袋も一緒にゆれる。老人は金魚にいつた。

「たしかに、お前はいい金魚じやない。しかし、今のお前は花のつ

ほみだ。必ず、美しくなる日がくる。名前は、ハナにしよう。ハナ。  
これからは、私と一緒にくらしておくれ』

こうしてハナは老人と一緒にくらし始めた。老人はハナの金魚鉢を  
縁側の窓辺においた。そこからは、商店街が遠くに見えた。老人は  
いつもハナの隣にいた。こうして老人は、自分が若い頃の話をよく  
ハナ聞かせた。

「今日はパリに行つた話しをしようか」

老人は何十年もむかし、絵描きをしていた。老人は絵を描く道具と  
少しのお金で、世界中を旅したという。こうして旅をしていた先の  
フランスのパリで、青年だった老人は、永遠の愛を誓う女性に出会つ  
た。

『彼女は美しかつたさ。金色の髪も青い瞳も何もかもがね』

そうして老人はその人と日本で結婚式をしたといつた。とても幸せ  
な話のはずなのに、なぜか、話おわった老人は悲しそうだつた。老  
人が悲しそうだつたので、ハナは少し寂しい気もちになつた。そう

いえば、ハナは老人のお嫁さんを一度も見たことがなかつた。

ハナが老人とくらし始めて何年かすぎたある日のこと。老人はハナの絵を描いた。じつとハナを見ては、ちよつとずつ絵を描く。一日中、老人はそれをくりかえした。老人が絵を描き終えたのは、空がすっかり真っ赤になつた夕方になつてからだつた。老人は絵が見えるように金魚鉢に絵を向けていつた。

「ごらんハナ。これが今のおまえの姿だ。体も大きくなつて、色も鮮やかになつた。ハナ、今のおまえは、花よりも美しい金魚だよ」老人が持つてゐる絵の中には、一匹の美しいが金魚がいた。その体は大きく立派で、赤と白のうろこは、光をあびて輝いていた。

『これが私。私の姿……。ありがとう。ありがとう、おじいさん』ハナは言葉にならない声でそういつた。ハナは、ここまで立派に自分を成長させてくれた老人の隣にいられることができ、なによりも幸せだつた。ハナはずつと老人と一緒にいたかつた。しかし、それは無理なことだといふことも、知つていた。

ハナが老人とくらし始めてから、もう十年がすぎた。今ではハナは、ほとんど動かない。金魚鉢の底でじつと静かにしている。今夜、また新発田の商店街ではお祭りパレードが開かれる。ハナは縁側から見るパレードが大好きだつた。夜のパレードのために少し眠つておこうと思つて、ハナは目をとじた。すると、遠くから自分を呼ぶ声がする。目を覚ますと、金魚鉢に、ハナの知らない女の人がうつっていた。髪は金色で、瞳は青かつた。女の人はいつた。

「ハナ、神様に会いにいきましよう」

けれど、ハナにはどうしても見たいものがあつた。ハナが何度も何度もお願ひすると女人の人はいつた。

「わかった。けれど少しの間だけよ。ハナ」

夜、縁側の老人の隣には空っぽの金魚鉢があつた。老人は何年前に描いた金魚の絵を持つて静かにパレードを見ていた。

「ほら、見えるか。お前の好きなパレードだ」

老人はふと、通りすぎていく台輪の一つに目をとめた。紅白の大

きな金魚が台輪の上で、まるで生きているかのように動いている。新発田名物の金魚台輪だ。老人は、その金魚の姿に十年間ずっと一緒にくらしてきただ紅白の美しい金魚の姿を重ねずにはいられなかつた。老人はいつた。

「なぜだろうなあ。まだ隣にお前がいるような気がしてならないよ。もしもまだ、そこにいるなら聞いておくれ。この十年の間、私は幸せだつたよ。ありがとう。ハナ」

そのとき、老人の横を小さな風が通りすぎた。その風にさそわれたかのように、老人のほほに、一すじのなみだが流れた。

それは、とても星の美しい夏の夜のことだつた。

作品に  
まつわる  
ご紹介



きんぎょだいわ  
**金魚台輪**

毎年八月の二十七日から三日間づづく新  
発田まつりが近づくと、大きな金魚があら  
われます。各町内の子どもたちがひく金魚  
台輪です。金魚台輪は竹や紙で形がつくら  
れ、目やうろこ模様をかきいれられた金魚  
を車輪(しゃりん)のついた台の上に乗せたものです。  
「わっしょい。わっしょい」祭りばんて  
んを着たいせいのいいかけ声の子どもたち  
にひかれ、金魚はひれを動かしながらまち  
の中を泳いでいきます。

金魚台輪は、明治の中頃に考案されたと伝わる郷土玩具で、小さな子ども  
が、夏の夕暮れに、車の付いた金魚の形のぼんぼりにろうそくを灯して引き  
まわして遊びました。まつりに登場する大きな金魚台輪には、各町内ごとに  
さまざまな趣向が凝らされています。

問合先：〇一五四一一六七八九（新発田市観光協会）



# 夏の思い出

小林 史緒

「ケイは変わりもんだよ。せつかく新発田に帰ってきたんだから祭りくらい行けばいいのに。」

母は、襖を細めに開けてそう言うと、私の返事を待たずにぴしゃりと閉めた。今日は新発田祭りの初日、八月二十七日。けれど、中学校は始まっている。九月初めには体育祭もあるし、テストもある。本当は來たくなかったが、母が「もしかしたらじいちゃん、今年が最後の夏だから。」などと言うので、しぶしぶついてきた。

新発田には母の実家がある。小学校までは新発田にいたが、中学校に上がると同時に新潟に引っ越した。私は新発田の祭りにいい思い出がない。小学校の頃は毎年、金魚台輪を引かされた。大人のかけ声にあわせて炎天下を歩き回った。子どものかけ声が小さくなると、とても叱られた。休憩所の木陰で食べる冷たいアイスだけが楽しみだった。

「どこもこんな時期に祭りなんかやらないよね。もう夏休み終わつてるので。」

母が閉めた襖に向かつて独り言を言うと、

「諏訪神社の本家の祭りがこの頃だから、それに合わせてるんさ。御射山祭りというんだ。長野県の諏訪神社の祭りだよ。」

後ろからじいちゃんの声がした。ここは、じいちゃんの居間兼病室だ。家中で唯一ここだけにクーラーがある。じいちゃんの身体のためだ。じいちゃんはもう何年も病気で入退院を繰り返していて、今はほとんど寝たきりだ。孫が私一人のこともあるつて、小さい頃からとても可愛がつてくれた。だから、夏にこの家に来ると、私はどこよりも涼しく居心地のいいじいちゃんの部屋に居座つていた。今日もじいちゃんの寝ている布団の横に寝そべつて、好きな作家の本を読んでいた。

「祭りは行つてなんぼだぞ。」

「そういうじいちゃんだつて、祭りには行かないじゃない。」

「祭りのけんか台輪のほうは好きじゃない。だが、奉納台輪は風情がある。夜が白く明けてくる頃にクーラーを止めてそこの窓を開け

る。そうすると、ぎいつ、ぎいつと台輪がきしむ音がこの部屋に聞こえてくる。見えるわけじゃないが、音だけで横になつていても祭りの朝だなあつて感じがする。あれがいい。」

「そうかなあ、私には暑いつていう思い出しかないけどね。」「それも祭りの思い出の一つだよ。ケイにとつて今に大事な思い出になる。なあ、じいちゃんが小遣い出すから、ちょっと屋台で焼きそばを買ってきてくれ。食べてみたいんだ。」

「食べられるの？　じいちゃん。」

私はびっくりしてじいちゃんを見た。治療の薬がどんどん強くなつていて、その副作用でじいちゃんは味を感じなくなつていた。何かを食べたいと言わなくなり、この一、二年でものすごくやせた。

「まあ、いいからさ。」

そう言うと、じいちゃんは枕の下から小銭入れを取り出すと五百円硬貨を私に渡した。

「しようがないなあ。」

私はそれを持つて外に出た。たちまち暑い空気がクーラーで冷えていた腕を刺した。ああやだやだ。そう思いながら祭りの屋台が広がる神社前におもむろに足を運んだ。

屋台の始まる場所に決まって出ている綿菓子屋の前まで来ると、人混みから突然、声がした。

「ケイ、久しぶり。」

見ると、六年生のときに同じクラブだつた子が二人、手を振つていた。懐かしい顔に手を振り返すと、向こうは手を振りながら走り寄つてきて「あつち。あつち。」と指さした。指さされた方向を見ると、三年間同じクラブだつた子が浴衣姿で手を振つてゐる。一人、三人といつの間にか、人混みの中に知つた顔が見え、諏訪神社の鳥居をくぐる頃には、十人以上になつていた。「懐かしいね。」「今、どうしてる?」を繰り返し、自動販売機で買つたジュースを手に話しこんでしまい、頼まれた焼きそばをじいちゃんのところに持つて帰る頃にはすっかり日が暮れていた。持ち帰つた焼きそばをじい

ちゃんはほんの一口だけ食べると、大きなため息をついた。

「味、分かる？ それ、食べられる？」

「心配ない。記憶の味で食べてるから。それより、ケイ。祭りに行つて良かつただろう。台輪を引いたりするだけが祭りじゃない。懐かしい人や思い出にまた会えるのも祭りなんじやないかい。」

「他で祭りをやつてないから、みんな新発田の屋台に集まるしかないし。」

私のへそ曲がりな答えに、じいちゃんは微笑みながら、もう一口、何の味も判らないはずの焼きそばを口に入れた。そして、

「ケイに焼きそば買ってきてもらつたことは、じいちゃんにとつては大事な祭りの思い出だよ。」

と、心に刻むようにゆっくりと飲み込んだ。

## 新発田まつり

新発田まつりは、朝早く、六つの町内の台輪が諏訪神社を目指す「奉納台輪」ではじまります。台輪が集まつた神社の境内には、出店が並びとてもにぎやかです。

三日間づく祭りの最後を「帰り台輪」が締めくくります。それぞれの町内へ帰つていく台輪が、勢いを競つて、「あおり」という、前の車輪を上げては下す動きをくりかえします。その勇ましさから、「けんか台輪」とも呼ばれています。

作品に  
まつわる  
ご紹介



新発田まつりの台輪は、享保一年、六代藩主溝口直治の、諏訪神社の祭祀に飾り人形屋台を出すようとのおふれにはじまるといわれています。一つしかない前輪が特徴の三輪の新発田の台輪には、激しい「あおり」に耐えられるよう先人の技が巧みにほどこされています。

問合先：〇二五四一二六一六七八九（新発田市観光協会）